論　文

大谷探検隊の活動と大谷尊重（光明）・渡邊哲信

片 山 章 雄

Kozui Otani's Expeditions and Sonju (Komyo) Otani, Tesshin Watanabe

Katayama Akio

Abstract

It is well-known that Kozui Otani's expeditions were sent during the years 1902-1904 (Central Asia and India by himself and T. Watanabe, M. Hori ; K. Inouye, Y. Honda), 1908-1909 (Mongolia and Central Asia by Z. Tachibana and E. Nomura), 1910-1914 (Central Asia by Z. Tachibana, A. O. Hobbs, K. Yoshikawa).

One of the most important problems is the dating of each member's departure and arrival concerning each area or place. The present author has inspected the existing related materials to obtain those datings, for example, the date of S. Fujii's leaving London, that of K. Inouye's returning to Japan, Z. Tachibana's date, E. Nomura's dates, etc.

Another problem is the compiling of the expeditionary reports in relation to the Russo-Japanese War, 1904-1905. Most of the compiling members were engaged in the missionary work under the war. After the war Kozui Otani gave those close to him the orders to explore various areas. S. Umegami was to go around the South and North America in 1907-1908, Z. Hashiramoto [i.e. A. Ama] to go to India, Kashmir in 1907-1909 [1908-1909], Sonju Otani and T. Watanabe to go around the South and East Africa, India in 1908-1909.

These unknown expeditions were sent during the same period with the Central Asian expedition.

はじめに

今から100年前に開始された西本願寺の大谷光瑞（1876［明治９］年12月27日～1948年10月５日）の主導による所謂大谷探検隊を，中央アジア地域の調査探検活動に限って略述すると，まず第１次隊５名が1902年８月にロンドンから出発（2001-10-20，横１～20頁参照，以下も使

用文献一覧の項に準じて表示)，中央アジアに入ってから途中で分岐した大谷光瑞を含むインド隊を別にすると，新疆隊２名のうち渡邊哲信のみが1904年５月に帰国している。続く第２次隊２名は1908年６月に北京から出発したとされ，モンゴルを経由して新疆に赴き一帯の調査を終えた後，1909年11月にスリナガルでインド旅行中の光瑞一行と合流，各地調査の後に野村榮三郎のみ1910年２月に帰国している。インドから英国に行った大谷光瑞によって派遣された第３次隊は，1910年８月ロンドンから橘瑞超と助手の２名で出発，新疆調査中に助手は病死し，辛亥革命直前の1911年５月に吉川小一郎が後続として日本を出発，敦煌で橘と吉川が合流し，その後はまず橘が1912年６月に帰国し，残った吉川は1914年７月に帰国している。

この大谷探検隊の活動の詳細，関係記録の追跡，収集将来品の問題を検討しようとする時，100年を経た現在でも不明な点が少なくないことを痛感する。時の経過とともに探検隊員やその遺族，関係者による証言や保管記録は減少するが，一方で先人の検索や紹介に漏れた貴重な零細文献も少なからず存在している。本稿では，主導者の非凡な発想や行動力を背後にもつこの探検隊を些かでも明瞭にすべく，探検の前提となる欧州留学者から探検隊員の発着日を可能な限り追跡することを第１の課題とする。そして，明らかになった探検隊派遣時期と各隊員の関係活動に対して同時進行していた，従前はほとんど，あるいは全く知られていないいくつかの関係する活動を掘り起こし，主導者の志向性に迫ることを第２の課題とする。

探検隊派遣100年を節目として，多くのことが解明されつつあるが，また新たな課題も出現すると考え，若干の材料を提示し検討の中間報告を試みたい。

欧州留学者の発着日

まず，欧州留学関係者，後の探検隊員の渡欧や探検前後の発着日について，判明している記録を網羅して扱われたことはこれまでなく，さらに筆者の検索による把握情報からの補充も必要と考えられるので，それらも含めほぼ年月日順に扱っておく。

薗田宗惠（西島覺了同行）は1899年８月16日に横浜を出港し（1939-12-31，83，85頁［改題再録＝1975-01-03，2，9頁]），９月１日サンフランシスコ入港，船中一泊（2002-03-//，13頁001)，翌２日に上陸している（1939-12-31，87頁［改題再録＝1975-01-03，12頁]；2002-03-//，13頁001)。これは開教使としての着任であるが，１年４か月の後，留学生としてドイツへ向かうこととなり，後段で再度扱う。続いて本多惠隆が大谷光瑞の欧州留学の先発として同年10月25日に日本を出発，南洋・シンガポール・スエズ・マルセイユ経由で12月24日にはロンドン到着していた（1994-05-18，47～52頁；2002-03-//，13～14頁002；2002-03-20b，横９頁)。大谷光瑞（随行長武田篤初，随員櫻井義肇）は同年12月３日京都発神戸着，船中で一泊し４日出港，日野尊寶と渡邊哲信も同行し，紀要前輯で初めて明らかにしたようにインド・エジプトを経由しイタリア・ナポリで下船，上記本多に出迎えられスイス・フランスを経て一行は1900年３月19日ロンドン着，途中から遅れた日野と櫻井は1900年３月６日ナポリ着，以後の上記一行との合流の有無，ロンドン着が同日か否かを詳らかにしない（以上，2002-03-20b，横３～12頁）[1]。続いて堀賢雄（上原芳太郎同行）が1900年５月23日に神戸を発ちカナダ・米

国経由で７月２日着英，同日ロンドンに至った（1940-07-15，108～114頁；2001-03-15，横２頁，23～24頁註（3），（4）参照）。藤井宣正は同年12月３日横浜で乗船し神戸経由で西進，インド洋・スエズ・マルセイユを経て1901年１月28日ロンドンに到着している（1906-12-01，436～437，512頁）。上記の薗田は1900年12月17日に任地のサンフランシスコを出発しニューヨーク経由で渡欧，翌年１月２日ロンドン着，さらに同月10日ベルリンに至った（1940-05-31，96頁，1940-06-30，86，87頁［改題再録＝1975-01-03，40～41，45，47頁］）。藤井・薗田の両名は1900年11月15日付で佛教大學教員となっており（1992-03-25，698頁），その身分で渡欧している。井上弘圓の渡欧については，記録や報道に依拠して扱われたことはこれまでなかったようで，1901年７月出発と考えられる情報（1901-12-06，133頁）を筆者が先に紹介したのが唯一であろう（2002-03-//，47頁）。井上は同年８月22日には英国・イーストボーンでの滞在が確認されている（1940-11-30，94頁［改題再録＝1975-01-03，77～78頁］）。

以上に扱った人物と同行した関係者中，武田と櫻井は1900年６月25日横浜帰着（2002-03-20b，横14頁），上原も同年10月15日神戸着（1940-07-15，179頁）で帰国しており，メンバーが揃った1901年８月以降の滞欧者は，大谷光瑞・日野尊寶・渡邊哲信・堀賢雄・井上弘圓・本多惠隆・藤井宣正・薗田宗惠の計８名となる。これらの留学者・滞欧者がこの時期に送受した書簡・絵葉書類の一部は，資料集中での提示を試みた（2002-03-//；2002-05-//）。他の西本願寺関係者では，藤島了穩が1900年５月23日に神戸から佛骨奉迎一行と往路同行しタイ経由で渡欧，９月上旬のパリの萬國宗教歴史會出席の後，同月中旬に渡仏した光瑞と日野に面会したことがあった（1900-11-26，29～30頁；2001-10-20，横２頁参照）。藤島は同年12月中旬帰国している（1900-12-11，17頁）。また，松原深諦（隨行佐々木至剛）は1902年５月20日神戸発（1902-06-25，21頁）で７月１日ロンドン着（1902-07-05a，1面；1902-07-05b，12頁；1902-10-15，11頁），後述のように光瑞のロンドン出発時にベルリンまで隨行し戻っては米国ニューヨーク・サンフランシスコから10月７日横浜に帰着している（1902-10-15，11～12頁）。松原の主目的は，留学中の光瑞の帰国を打ち合せ確認することにあった。

以上，留学・滞欧に関わる発着の年月日記録は，誤報・誤記と判断される文献を除き，そのほとんどを扱った。

第１次隊員の発着日――欧州出発隊員の現地到着――

次は所謂第１次大谷探検隊の諸隊員の各発着であるが，これについても重要ながらなお未言及の一部の記録や錯綜した未検討の記事もある。紹介して整理と検討を試みる所以である。

中央アジア・インド地域を踏査する第１次探検の出発報道については，すでに紀要前々輯で「1902年８月，大谷探検隊のロンドン出発」と題して扱っておいた（2001-10-20，横１～20頁）。そこでは『ザ・タイムズ *The Times*』の報道記事の問題を軸として論を展開していったため，当初のメンバーの出発時差には言及しなかった。日記類から周知のように，大谷光瑞と日野尊寶・本多惠隆・松原深諦（三井物産渡邊專次郎も露西亞まで同行）の一行は８月16日午前10時にヴィクトリア停車場からベルリンに向けて出発（日野・松原は同地までの予定），見

送りは藤井宣正・渡邊哲信・井上弘圓・堀賢雄で，薗田宗惠と佐々木至剛はわずかに早く9時半前の汽車でベルリンへ，井上と堀は同日午後の汽船でペテルスブルグへ，という状況だった。17日ベルリンで松原下車（日野は下車せず同行），18日露京着，20日渡邊哲信がロンドン発，21日に井上と堀が露京に着き合流，22日には渡邊哲信も露京着・合流，一行は24日夜に同地を後にして翌25日モスクワ，一泊して大谷光瑞一行5名と日野は別れ，それぞれ南進・西還することになった（以上，1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，3〜8，239頁）。なお，ベルリン滞在の松原・佐々木は8月24日発デンマーク・オランダ・英国を経て米国に渡ったといい，日野は同月28日ベルリン着，31日も同地にいたので帰英は9月であろう（以上，1941-05-05，74〜75頁［改題再録＝1975-01-03，101頁］）。

1902年9月，ロンドンには藤井と同地に戻った日野，ベルリンには薗田がいたが，前二者は同月下旬，後者は翌10月上旬にそれぞれの地を出発した。すなわち，藤井は日野に同行して9月24日にロンドン出発とされたこともあったが（1941-05-05，79頁；1941-06-30，75頁［改題再録＝1975-01-03，107，113〜114頁］），インドの清水黙爾に宛てて9月の「廿六日」出立と書き送っているし（1907-09-17，379頁），現に「九月廿六日……在英京」との写真裏書（2002-03-//，5，11頁104；2002-05-//，64頁104）が存在しているので26日は確定し，セイロン（現スリランカ）のコロンボに10月20日着（1906-12-01，561頁）[2]，その後同月28日にボンベイ（孟買，現ムンバイ）に至り（1977-09-15，17頁）[3]，以後第1次隊のインド分隊と連携して探検調査し，また合流した。薗田はベルリンからマルセイユに至り同地を10月10日の便船で出港（1941-05-05，78頁；1941-06-30，73頁［改題再録＝1975-01-03，106，112頁］），同月24日にボンベイ到着（1941-06-30，74頁［改題再録＝1975-01-03，112頁］），以後北インドへ赴き第1次隊のインド分隊に合流している。

中央アジア・インドでの調査については，少なからぬ日記類や報告・書簡類が公刊され，また研究も継続されているので，近時筆者紹介の大谷光瑞名義の英文報告 “The Japanese Pilgrimage to the Buddhist Holy Land, A Personal Narrative of the Hongwanji Expedition of 1902-03”（1906-10-//，pp.866-878［2002-03-31，横23〜26頁に転載］）があることを指摘して他は割愛する。ただし，以上に扱った当初からの隊員以外の，新たな合流者の発着とこれまで未言及の記録の問題は依然として残されている。

第1次隊員の発着日——日本出発隊員の現地到着と各隊員の帰着——

大谷光瑞が第1次隊のインド分隊の応援隊員を帰国した松原に要請したため，上原芳太郎は島地大等・秋山祐頴・升巴陸龍とともに1902年10月19日に神戸から出発，11月10日コロンボ着，そして19日に孟買着（以上，1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，45，47，48，50〜51頁；1940-07-15，184，186，190頁），以後インド隊と連携・合流となった。また，単身インド留学のため1902年3月15日に横浜から乗船し4月17日孟買に到着した清水黙爾（嘿爾）は，主にカルカッタ（現コルカタ）に滞在していたが11月28日同地発，30日には北行する上原・升巴と出会い翌日には一行に加わっている（以上，1907-09-17，220，320，388頁）。中央アジアを経て南下

した大谷光瑞と井上・本多，海路来た日野・藤井，薗田，さらに日本からの上原・島地・秋山・升巴，留学生清水の11名が連携・合流して各地の仏蹟調査に携わったことになる。さらに年末12月30日，吉見圓藏・渡邊哲乗・野村禮讓・茂野純一・前田徳水が神戸解纜，シンガポール経由で1903年１月下旬には緬甸（ビルマ，現ミャンマー）に到着している（以上，1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，133頁）。光瑞は同年１月18日カルカッタで門主である父・大谷光尊（明如）の遷化を聞き便船の確保が容易でない状況下帰国を急ぐ。２月２日出港，同行者は日野・上原・升巴，５日ラングーン（現ヤンゴン）で上記渡邊哲乗・吉見に迎えられ，６日マンダレーで前田・野村・茂野と合流した（以上，1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，79～80頁）。

大谷光瑞一行はラングーンに戻り13日乗船，ペナン・シンガポール・香港（本山関係奉迎者として水原慈音・朝倉明宣・武田篤初既着）・上海（同三谷教應）を経由し３月12日長崎着，西日本・関西の諸新聞が伝えるように升巴のみ行李20余個を携え神戸へ，一行は長崎一泊，下関発の車中で一泊し14日帰山した（以上の一部は1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，81頁に依拠）。この後の隊員の記録や帰還月日に未紹介のものが少なくない。そこで途次の記録若干にも言及しながら整理・検討を加えておく。

まず最初に帰国したのは，1902年12月下旬から1903年３月中旬まで清水黙爾とともにネパール（1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，91～105頁）に入った井上弘圓で，これまで指摘がなかったが４月６日にカルカッタを島地と一緒に出発して24日に香港へ着き，ここで島地と別れ（1903-07-30，2面），５月５日神戸に帰着している（1903-05-08，１面）。井上には「大谷光瑞師一行　支那印度の探険(一)」（1903-05-14，７面）から始まる計４回の談話記事がある。欧州に帰還すべき藤井は，1903年５月５日にコロンボから因幡丸に乗船したが，病状の悪化によりマルセイユに上陸して入院し，わずかに快方に向かう徴候があったものの，６月６日に同地で客死した。14日パリにおいて火葬，その後遺骨は８月20日に神戸に着いている。上記の井上（飯山の真宗寺出身）の姉・瑞枝が藤井（与板の光西寺出身）の妻となっていた。井上はこの時に須磨の大谷家別荘に滞在中で，与板・京都からの関係者とともに遺骨を迎えている。1904年１月に真宗寺を訪問した島崎藤村は藤井が錫蘭やインドから投じた多数の絵葉書を実見，「椰子の葉蔭」（『明星』同年３月号掲載）を書くに至ったことは周知であろうから，関係の文献は割愛する。

前田徳水は他の４名とともにマンダレーから雲南の大理着，４月３日楊林で茂野・野村は別れて東進し貴州へ，自らの一行は北上して四川の叙州，ここで渡邊哲乗と別れて水路で重慶，陸路で宜昌に至り吉見と上海へ，そこから前田は神戸に帰り着いていて（1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，133～134頁），それは1903年７月８日のことだった（1903-07-10，２面；1904-02-18，58頁）。吉見の帰国は確認しにくいが，後述のように５月20日付で佛蹟巡拜記編纂係の辞令が出ており，また軍隊布教員として６月末時点のリストに駐在地は姫路と掲載されており（1903-09-05，10～11頁），さらに７月18日～25日の上海における島地の滞在，茂野・野村の滞在を報じる同地発の記事にもその名が見えないので（1903-07-30，２面；1903-08-04，１面），前田と同船・帰国の可能性も疑われる[4]。上海には上述のように７月18日に島地大等が到着，同時期に茂野と野村も同地滞在，茂野と島地の２人は29日に神戸に帰還した（以上，1903-07-

30，2面；1903-08-04，1面；1903-08-05，20頁；1903-08-08，２面)。なお，島地は香港で井上と別れてから広東・福建を巡って厦門に至り，光瑞の電命で新規調査のため止まっていたところ，そこで見た『時事新報』で藤井の死を知り６月中下旬に瑞枝に一信を投じて福州近辺の調査へ出立（1903-//-//，後半64～66頁)，電命に密接に関係する光瑞の書簡が詳細を伝え(1999-06-//，縦35頁)，７月４日福寧着が判明している（2002-03-//，２，12頁141；2002-05-//，80頁141)。また，野村は浙江・山東を調査する予定で光瑞の指示を待っていたという(1903-08-08，２面)[5]。

野村が帰国したのは，インドでの調査（一時ネパールにも入る）を終え1903年４月27日にカルカッタを発してシンガポールからインドネシア方面を廻り（1994-05-18，170～173頁）上海経由で戻った本多と同日で，それは９月２日のことだった（1903-09-15，12頁)。この間の８月20日，インドに滞在していた清水黙爾は発病して孟買に没した（1903-08-23，39頁；1907-09-17，前付２頁)。薗田は1903年のおそらく５月にインドを離れてドイツへ向かい，調査残務等を処理し，いずれかは誤りであろうが11月の６日にベルリン出発（1903-12-05，17頁）とも同月１日にアントワープから乗船とも伝えられ（1903-11-25，31頁)，その帰国は同年末(1975-01-03，193頁)，12月23日神戸着という（1968-09-20，400頁)。以上のうち，渡邊哲乗は後段でも触れるように中国に継続して滞在していたことが明らかであり，インド調査の秋山については，大谷光瑞の命令を転記した1903年２月７日の藤井日記の「秋山ハ薗田ニ附セリ是モ直ニ帰朝スヘシ但三月下旬ノ事ナリ」(1977-09-15，43～44頁）との記載が知られるが，現在のところ筆者はその帰国の月日を確認していない。

1902年10月14日に大谷光瑞・井上弘圓・本多惠隆とタシュクルガンで別れて新疆各地の調査に従事した渡邊哲信と堀賢雄は，日記類から周知のように1904年２月，日露の開戦を聞き28日咸陽で渡邊哲乗と邂逅，３月22日に西安・藍田で弟と堀に別れた哲信のみ５月４日に帰国した。

渡邊の帰国月日は主要文献において誤伝がほとんどだったため，かつて上記月日を載せる『地質學雑誌』に言及し，「本月四日獨逸船パイエルン號にて神戸に歸着」(1904-05-20，203頁／「パイエルン」は正しくは「バイエルン」）とあるのを新字に改め紹介したが（1986-12-30，32頁)，この記述は誇張され「片山章雄が指摘するように，わずかに……『地質学雑誌』が……哲信の帰国を掲載したにすぎない」とされた（1992-12-25，143頁)。未紹介零細記事の一例だった筆者の指摘が唯一の存在と読まれるのは遺憾で，実際には他にも記事がある。帰国３日後の「中亞の大旅行僧」(1904-05-07a，１面)，「渡邊哲信氏の歸朝」(1904-05-07c，18～19頁）等の記事にも４日神戸帰着を記し，前者は光瑞と面会の上帰山を，後者では談話を伝えている。なお，渡邊は最近写真も紹介された小犬の「達子 Tash」(2001-03-15，横４頁）を連れ帰ったことが，この時の上海発の記事に出ている（1904-05-07b，２面)。

第２次隊員・第３次隊員の発着日

1908年４月９日付の辞令（1908-04-25，29，31頁）を受け取った第２次探検隊員の橘瑞超と野村榮三郎は，神戸から出発した。前者は最近まで，後者はまったく指摘がなかったようだが，

４月10日には橘が上海に向けて（1910-01-21，1面［ほぼ再録＝1913-04-21，90頁；復刻＝1993-08-25，90（138）頁］；2002-01-//，30頁），11日には野村が北京へ向けて（1910-02-25b，2 面；1910-02-26，25頁），それぞれ発ったのである。このうち橘の渡航から上海着，以後付近の探訪から北京までの記録は言及すら皆無だが「清國通信」として８回に分けて公表されており，４月12日から６月15日までを時に詳記，時に略記している（1908-07-25，16～19頁；1908-08-01，12～14頁；1908-08-08，11～13頁；1908-08-15，11～15頁；1908-09-26，29～33頁；1908-10-03，26～28頁；1908-10-24，12～13頁；1908-11-07b，10～11頁）。橘と野村が６月16日に北京を発ったのは周知のことで，まとまったものとしては同月25日の張家口出発から始まる野村の「蒙古新疆旅行日記」（1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，439～555頁）がよく利用され，これと対照・補完させるかたちで６月16日から10月７日までの橘の報告「使命記蒙古の部」一～三，さらに関係地図・写真・スケッチ等がまとめられた（2001-05-01，4，18～22，23～324頁）。

橘と野村の探検調査の内実に関する新知見や検討成果は別稿に譲り，新疆のヤールカンドからカルガリクを経て南下してレーに至り，そこから西方のスリナガルには橘が10月30日（実は11月１日）に先発，翌日野村も出発し，橘はインド旅行中の大谷光瑞一行にソナマルグで11月４日に合流，野村はスリナガルで11月10日（実は12日）に合流している（以上，1935-04-10，145頁；1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，552～554頁）。

以上の背景には，1909年９月24日に神戸から出発した大谷光瑞・籌子夫妻一行（随行長足利瑞義；上海まで同行見送りに内田宏道；香港まで同行見送りに乗願院大谷尊祐；大阪毎日新聞記者關露香同行）の訪印があって，10月13日コロンボ着，同18日孟買着で北上して上記のように第２次隊と合流，以後はインド各地で離合集散して調査活動を続行した。なお，日本を先発したのは８月27日辞令の柱本瑞俊，29日辞令の和氣善巧，９月11日辞令の青木文教（以上，1909-09-18，３頁）で，前二者が８月27日神戸発，９月19日カルカッタ着，北上中の10月12日両者相別れて29日，すでに合流した和氣を含む光瑞一行に柱本が参入している（1935-04-10，155頁［改題再録＝1937-04-10〈復刻＝1984-11-12〉，212～213頁］）。青木は９月中旬出港かと推測され，10月10日ペナンにて光瑞一行を迎送し，予定では同地からカルカッタに至ってアッサム地方を調査するといい（1913-04-21［復刻＝1993-08-25，15（63）頁］），12月に光瑞一行と合流している。1909年から翌年にかけての大谷光瑞・籌子，橘・野村，足利，柱本・和氣，青木らの行程や集散は別に扱うこととする。ここでは中央アジアの第２次探検，インド調査をほぼ終えて西航し英国に至った大谷光瑞・橘らの一行と，後続の一行，別れて東航し帰国した野村の発着を扱っておこう。

1910年１月下旬，野村榮三郎は光瑞の「日本にて待て」との命令により29日孟買を出港（1935-04-10，163頁），その帰国月日は扱われたことがなかったが，わずかに報道された２記事の一致から２月21日神戸帰着と考えられよう（1910-02-25b，2面；1910-02-26，25頁）。戻って大谷光瑞一行の孟買発だが，時期は１月下旬（1935-04-10，160頁／1937-04-10，123頁の「一月中旬」は採らない）とも２月（1935-04-10，164頁）とも言われ判然としないが，夫人籌子の他に随行は橘と柱本で，紅海を経て光瑞と橘はスエズで下船，籌子とこれに従う柱本はポ

ートサイドで渡邊哲信の出迎えを受け一路マルセイユへ（1935-04-10，159頁），その到着日は籌子の絵葉書から２月12日と判明する（1935-04-10，216頁）。前年９月15日に婚儀を挙げ，12月25日に神戸から渡欧した九條良致・武子夫妻は，1910年２月12日より前にマルセイユに到着しており，16日以後同地から籌子・武子両夫人に渡邊が随行して地中海周遊となった。第３次探検の出発地となるロンドンへは柱本が先着，続いて九條良致，その後に光瑞・橘，さらに遅れて両夫人と渡邊が到着したという（1935-04-10，159頁）。したがって具体的には挙げないがほとんどすべての著述中の，マルセイユにおける二組の夫妻の合流は錯誤である。大谷光瑞と橘瑞超の着英が２月下旬だったことを示す記録があり，３月８日ロンドン大谷光瑞発のヘディン宛書簡も紹介されている（1991-01-21，7面［再録＝1992-08-12，49〜50頁］；2002-03-20a，165〜166頁）。籌子・武子・渡邊の周遊は既公表の絵葉書テキストの誤記か誤植らしきものを一部訂正し渡邊の回想を合わせれば，ナポリ・アテネを経て２月28日から３月４日までエルサレム，同日エジプトへ向かい７日，8日はピラミッド見学とカイロ滞在，その後ナポリへ上陸し，ローマ観光が知られる（以上，1935-04-10，153〜154，169，216〜217頁）。２月から５月にかけて欧亜の英語・独語の紙誌に光瑞や橘が登場した回数は，筆者把握分でも２桁を数える[6]。

ロンドンでは九條良致は別居，渡邊は従来からの下宿，光瑞のマンションには夫人の他に前記の隨員がいたと言われ（1935-04-10，159頁），渡邊の住所は83，Gower Street，W.C.，光瑞は 38，Hyde Park Gate,W.と記録される（1910-06-//，pp.16，17）。インド調査の和氣とダライラマに謁見もした青木のカルカッタ発は４月の７日とも10日ともされ，同29日に英国プリマス上陸，翌30日にロンドンに至っている（1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，123〜125頁）。なお足利の着英は，その明記が見当たらず，インドから帰国かとも伝えられたが（1910-02-25c，2面），父・義山の入寂・本葬に関して喪主瑞義の在英を伝えた記事があり，後年には遅れて「四月頃入英」（1994-03-01，26頁）とし，後述のように橘の探検の出発に際し途中まで同行もしていて，光瑞帰朝まで隨行長を全うしている（1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，123頁）。さらにロンドンには1910年５月25日敦賀発で６月19日着と伝えられる光瑞の弟（光尊四男）・積德院大谷尊由と隨行の藤山尊證が滞在，所用を済ませ尊由と柱本が７月１日に同地発で尊由のみ同16日に帰国，柱本は途中別れてハルピン・北京経由で帰国している（以上，1910-05-28a，１頁；1910-05-28b，10頁；1910-06-25，2頁；1910-07-09，17頁；1910-07-23，2頁；1935-04-10，159 頁［改題再録＝1937-04-10〈復刻＝1984-11-12〉，215頁］）。この時期，ロンドンには本山技師鵜飼〔長三郎二樂莊建築主任〕がいたとされ（1935-04-10，164頁），また同年６月に光瑞の伝記『法主大谷光瑞上人傳』（國晃館）を上梓した報知新聞記者廣田四郎も渡英，部分同行している（真宗寺所蔵の籌子・武子・ミルン夫妻・廣田の1910年８月７日撮影写真，1999-06-//，横８頁で言及）。

第３次探検は1910年８月，ハイドパークで90歳のナイチンゲールが亡くなった翌日14 日，先発の助手ホッブズ（A.O.Hobbs）を露西亞に向けて送り出し，また15日には諸国巡遊から帰途につくためオランダへ渡る籌子夫人らを見送った橘（ベルリンまで足利同行）が，16 日にロンドンを出発して開始された（以上，1912-06-15，１面［改題再録＝1912-12-28，1〜２頁；単行本再録＝1937-04-10〈復刻＝1984-11-12〉，733頁；復刻＝1988-09-20，1〜２頁；現

代語訳文庫化＝1989-06-10，11頁])。出発前日の橘を知る夫人随行者渡邊は，１年10か月近く後の橘帰国直前に「剛膽の瑞超師　近日無事歸朝せん」という記事の中でコメントを述べている（1912-05-29，４面；1986-06-30，口絵２頁)。足利はベルリンから引き返し大谷光瑞の随行として和氣・藤山とともに８月20日ロンドンを後にし（1910-09-24，9頁；1935-04-10，165頁；1937-04-10［復刻＝1984-11-12]，123頁)，一行は10月５日に神戸着で翌日帰山，一方の籌子・武子・渡邊はシベリア鉄道で９月29日ウラジオストク着，そこから乗船して10月１日敦賀着，即日帰山した（以上，1910-10-15，15，17頁；1954-10-01，56～57頁)。

翌1911年，１月27日に籌子急逝，失意の後に宗祖大師六百五十回大遠忌法要を無事勤修した光瑞は，５月28日に吉川と助手の李毓慶を派遣，住吉駅から出発して翌日下関，そして門司から上海に渡り漢口・西安・蘭州を経て安西から敦煌に到着・滞在，1912年１月26日に新疆の地で１年余りの調査を終えた橘と邂逅した（以上，1937-04-10［復刻＝1984-11-12]，559～596頁)。この後２人は敦煌・吐魯番間やその近辺を調査，さらに烏魯木斉（ウルムチ）に赴き，４月26日に同地で別れるまで大半の行動で連繋した。そして橘は北上しオムスクからシベリア鉄道に乗り途中下車，ハルピンから朝鮮半島を経由，多くの報道にあるように1912年６月５日に神戸に帰着した。残った吉川は1914年まで新疆各地を調査，帰路は甘粛から内モンゴルを経由して北京に至り，塘沽から日記最末尾にあるように７月10 日に神戸に帰り着いた。光瑞の英国出発後も青木はしばらく残留し，帰途ダライラマに謁見のため訪印，南インドでの調査報告を1911年２月15日にカルカッタから送り（1937-04-10［復刻＝1984-11-12]，126～129頁)，さらにダライラマが選出した日本への留学生を同伴して５月に帰国したといい，翌1912年１月23日には青木と多田等觀・藤谷晃道らがインドへ渡航，青木・多田の入蔵という諸活動もある。しかし，中央アジア地域を中心とし第１次から第３次と数える探検活動の発着日の追求を一方の目的とする本稿では，範囲外として言及をここに止める。

以上，いくつかに区分し，所謂大谷探検隊の隊員の発着の問題をある程度詳細に扱った。そこでこれらの間の時期，具体的には1903年から1908年，1909年頃までの諸情況・諸活動も適宜分け，３次の探検の連続や断絶の問題を考えることとする。

第１次・第２次探検の間――諸記録の公表，須磨における事業――

すでに述べたように，第１次探検のインド隊員，東南アジア・中国踏査者のうち，直接還った者はすべて1903年の３月から９月に帰国しており，新疆隊については渡邊のみ1904年５月に帰国している。そこでこれらの時点から第２次探検までの間に，探検に関連する諸事業にどのような連続ないしは断絶があったのか，その問題を整理・検討してみよう。

1903年３月25日に大谷光瑞が出した直諭には，「法顯玄奘の舊蹤を慕ひ，……佛祖の靈蹟を探り」，その「靈跡探檢の事實」を父・光尊に告げようとするも果たせぬことになったことが述べられているが（1904-02-07，巻頭１頁)，４月下旬には光瑞が10万頁の大著述の公刊を予定している旨が紙誌に報道され，５月の傳燈奉告會法要中の５日には数百名の関係者に発掘物・将来品や写真・拓本類を陳列公表している（1903-05-15，4頁)。早くも同月20日には，ア

ショーカ王碑文の写真図版が誌上掲載された（嘉納治五郎主筆誌『國士』第6巻第56号口絵，2001-04-20，31頁写真3参照）。探検に関する報告，記録類と将来品の公表は，光瑞自ら早い段階から意図していたと考えられる。すでに4月から随行員（無記名）の談話・手記も公表されていたが，5月中下旬には前記のように記名の井上の談話連載（1903-05-14，1面を初回とし全4回）があった。

以上を端緒とする諸記録の公表との関連で注目されるのが，5月下旬から大谷家別邸があった須磨の山側，月見山のテントで開始された佛蹟巡拜記編纂で（1903-06-05b，10頁），足利義藏が主任との情報，その須磨入りも報道された（1903-05-27，1面；1903-05-28，1面）。その編纂係の辞令交付は一部未帰還者にも及び，5月20日付の日野尊寶・上原芳太郎・足利義藏・朝倉明宣・薗田宗惠・藤井宣正；渡邊哲信・本多惠隆・堀賢雄・井上弘圓・升巴陸龍・秋山祐潁・嶋地大等［正しくは島地］・渡邊哲乗・前田得水［正しくは德水］・野村禮讓・茂野純一・吉見圓藏と，21日付の瀧川寛了・朝日保寧の計20名が対象であった（1903-06-05a，3～4頁）。これらの隊員の何名かの記録や通信文は，光瑞の帰山前後に亙って雑誌や新聞に少なからず掲載されていたが，帰還して辞令を受け取った者は一定の方針のもとで実務に携わったのであろう。6月，隊員中で最も筆まめな藤井の絵葉書と推定される短信5通が『高輪學報』に掲載された（1903-06-05c，86頁）。しかしその翌日6日，藤井はマルセイユに病没し，まもなくその訃報が伝わる。同月25日から須磨の事業に関与した禿氏祐祥は，この時期の回想を残している（1955-12-25，20～22頁）。

この後9月まで，須磨での光瑞の断続的滞在，テント中の事業がしばしば報じられ，また未帰還者の通信文の公表，帰朝者の須磨参入記事も散見する。ちなみに探検中の新疆隊員渡邊・堀からの通信文は，『中央公論』へ寄稿するつもりで書かれ実際に「中央亞細亞探險記」として同誌に載っている（1903-08-01，36～41頁；1903-09-01，35～38頁）。ただしほぼ同内容のものは朝倉宛に送付され，わずかに早く『教海一瀾』誌に掲載された（1903-07-25，16～23頁）。朝倉は上記編纂事業に関与しており，この事業と探検継続中の隊員による通信記録の扱いの関係が垣間見れよう。関係者の在須磨情報としては，井上・島地・朝日が見え（1903-08-18，77頁），さらに前田もあり（1903-09-18b，72頁），また吉川小一郎の回想には本多（1978-04-15，111頁），先の禿氏回想には佐々木行應，帰国後の薗田の参加も記されている（1955-12-25，21～22頁）。

8月19日にテントの編纂所を訪問した島地黙雷は，同夜京都で島地大等と会い，翌20日は大等が藤井の遺骨を迎えに神戸往復，そして21日に黙雷実子の清水黙爾の病没を東京からの電報で知ったという（1903-09-23，26～27頁［改題再録＝1978-10-10，363頁］）。黙雷にテント訪問を題材とした漢詩「觀月山莊所見有感」がある（1904-01-23，33頁）。この直前の8月17日，島地大等は京都滞在中に錫蘭日記を抄録して同窓会誌に投稿，翌月分載第1回（1903-09-18a，32～38頁，再録なし［第3回のみ『新西域記』に再録］）が出たように編纂事業とは別の個人公表もあり，また彼岸の後には編纂部テントを除いて生活用等のテントが引き払われる予定だった（1903-09-10，1面）。翌1904年1月，本願寺室内部（本多惠隆代表）の名で『印度撮影帖』が刊行されたが（1904-01-10）[7]，この書には島地大等の尽力が大きく，大等とともに一

本を賜った黙雷は，前年12月に大等が光瑞の命を受け編集に従事したことを記した（1907-09-17，480頁）。須磨における作業ないしはその延長の作業成果といえよう。なお，1904年１月には光瑞名義の「パミール紀行梗概」の連載第１回が公表された（1904-01-15，附図第１，３～11頁［図版を除き改題再録＝1937-04-10〈復刻＝1984-11-12〉，前付３頁以降］／全６回）。前年夏の須磨における禿氏の起草作業に光瑞が自ら校閲・加筆をしたものである（1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，前付２頁／「明治三十七年初夏」は採らず掲載前年夏と解釈）。

以上のような諸記録の公表路線，須磨における事業は，しかしながら永続しなかった。諸記録の公表という点では，上述のように1903年９月からの島地大等日記の分載，1904年１月以後の光瑞の紀行梗概分載，翌月からの前田の紀行概略分載があり，また５月４日の渡邊哲信の帰国後はその旅行談分載（1904-05-14，14～15頁；1904-05-28，12～13頁），同一日の３記事（1904-05-25a，２面；1904-05-25b，２面；1904-05-25c，４面）[8]，さらに６月27日を記者の「はしがき」とし翌日から本文開始の渡邊哲信「中央亞細亞探檢談(一)」（1904-06-28，２面［一部削除して再録＝1937-04-10〈復刻＝1984-11-12〉，219～220頁］／全20回），９月の「中亞馬蹄の塵」（1904-09-01，48～52頁），等々があった。また1905年には年頭から『地學雜誌』が『印度撮影帖』の図版を３号連続で転載したり，続く４月，5月には薗田の「現時の印度」を連載（1905-04-15，247～255頁；1905-05-15，316～325頁），翌1906年は後述するように９月27日から９か月に及ぶ光瑞夫妻の中国旅行があったが，出発前には既言及の光瑞名義の英文著作がニューヨークに送付され，旅行中にそれが掲載されたり（1906-10-//，pp.866-878），また国内でも藤井の遺稿が刊行されたりしている（1906-12-01）。

以上に扱った時期の諸記録の公表の他に，本稿では割愛するが，探検による収集将来品に関する外部者の研究もある程度公刊されている。しかし先に指摘した須磨における諸事業は，その継続性を確認できない状況が出現した。その背景・理由は，他でもない日露戦争の勃発であった。

第１次・第２次探検の間――日露戦争と大谷尊重・渡邊哲信――

須磨での佛蹟巡拜記編纂に関与すべき前掲の辞令交付者と，吉川は別にしても禿氏と佐々木を加えた計22名のうち，藤井は1903年６月に病没，渡邊哲乗は同年の調査終了後も中国滞留で未帰還，同年10月中旬の報恩講では日野・本多・井上・升巴・瀧川，日野・足利・朝倉・瀧川・本多という関係者が顔を揃えたが，1904年になると戦雲近づく状況下で臨時部が設置され，足利・本多は部員，上原は加談となる。升巴は１月13日長崎発で大連へ（1904-02-05，5～６頁），井上も14日同地発で上海経由北京へ（1904-01-25，21頁），それぞれ布教使として向かった。以後逐一出典を挙げないが間もなく足利・野村禮讓が軍隊布教員となり，２月10日露西亞への宣戦布告の後に本多も軍隊布教員，この頃に吉見は在北米とも言われたが（1904-02-18，59～60頁）後には軍隊布教員，足利は軍隊布教員監督，朝日は第三佛教中學長事務取扱，少し後には名古屋別院輪番，前田も軍隊布教員となっている。相前後して帰国したのがすでに述べた渡邊哲信で，堀は中国に滞留し未帰還，同年秋の時点でほとんどの関係者は，本務ではない

須磨の事業に，継続して関与することは不可能になっていた。

1904年５月４日に帰国した上述の渡邊哲信の，その後の動向は象徴的である。これまで，「帰国後の哲信の動向は正確にはつかめない」が，同年秋に「遼陽……に派遣されたのであろう」とされていた（1992-12-25，144頁）。煩雑になるので一部出典を略すが，渡邊は帰国２日後に臨時部の部員とされ，６月21日には軍隊布教員となっていた。本多はすでに５月20 日某地出港で23日某地上陸，遼東半島方面におり（戦時ゆえ紙誌における公表通信文に伏字が頻出する），６月１日には光瑞の弟・積德院大谷尊由が広島を出発し某埠頭から出港，６日某地上陸，３時間余り内陸に進んで至った地では本多らが出迎えている。光瑞の弟（光尊三男）・淳淨院大谷尊重（後に光明）は８月22日付で戦地布教のため出張が命ぜられ，渡邊はこの尊重に随行することとなった。９月５日午前に廣島別院から乗車１時間，某港で乗船・休憩，２泊して７日午後出港，某日某港に進入すれば尊由らが来船，一同下船して従軍布教使監督部に着いたと渡邊の日誌に記される（1904-09-24，15～17頁）。この時期の『教海一瀾』・『布教叢誌』，その他関係紙誌を検索すれば，本多の佛蹟探險談を含む「陣中隨筆」や前田の「陣中日記」，野村禮讓の「戰塵餘録」等，かつての探検隊員からの送信情報も散見する。

同年10月８日，武田篤初に隨行して上原と木村省吾が渡航，この３人は６月中旬から３か月，朝鮮半島を視察したが，この時は清國行で同月15日芝罘寄港時に升巴に迎えられ，翌々日塘沽上陸時には渡邊哲乗が出迎え，即日北京に至り21日の公使館晩餐会では哲乗が，26 日の昼餐会では渡邊哲信・哲乗兄弟が同席している（以上，1940-07-15，223～225頁）。11月初めには上原の石經山調査，北京に戻って６日には内田康哉公使や書記官，時事新報の龜井陸良らを招いての会食，両渡邊も同席しているが，しばらくして哲信は一時帰国，上原は空いた借家に堀と同居したという。内田公使も12月９日に帰国の途につく（以上，1940-07-15，226～233頁）。この内田を神戸に出迎え本山まで案内したのは，帰国中の渡邊哲信だが（1904-12-23a，2面），哲信は再度渡清することになっていた（1904-12-23b，2面）。1905 年１月９日，上原が營口で出迎えを受けた中に佐々木行應がおり，29日に大連では内田公使と同船来着の渡邊哲信と合流，上原・渡邊は翌日遼陽の大谷尊重を訪問，ついで本多の宿舎に泊まった。２月12日，北京で武田篤初の病状が悪化し客死，見舞っていた武田の子息，上原と渡邊哲信・堀も枕元におり（以上，1940-07-15，236～240頁），さらに後に光瑞とよく通ずるようになる水野梅曉の姿があった（1939-03-11，319頁）[9]。

1905年５月14日，渡邊哲信はジョージ・アーネスト・モリソン（George Ernest Morrison）に宛てて短い書面を書いた。内容は『印度撮影帖』の献呈に関することで，その書面は現在東京・駒込の東洋文庫にあるモリソン旧蔵の同書に貼られていて，発信地は北京の「六條胡同」と推定される。渡邊の北京滞在に断絶がなかったか否かは確認しにくいが，前年９月の渡航時に隨行した当の大谷尊重は，1905年11月23日に帰国している（1905-12-07，3頁）。ここに，1904年から翌年にかけての大谷尊重と渡邊哲信の関係は一区切りとなる。

翌1906年，大谷光瑞は夫人同行で７月11日に京都を発し北海道・樺太（現サハリン）巡化の途につく（隨行長大谷尊重）。９月17日帰山，そして同月27日，再度夫人同行で中国旅行に出発した（隨行長大谷尊由）。隨行には兼安洹乗・福井瑞華・谷清輝，夫人隨行として甲斐和里

子があり，渡邊哲信・堀賢雄・前田德水・渡邊哲乗も名を連ねている。かつての探検隊員のうち，一度帰国が判明している堀は別としても，何名かは現地合流とも考えられる（以上，1935-04-10，88～89頁；1954-10-01，40～41頁；2001-03-15，横 3 頁，25～26頁註⒁）。この旅行の詳細は割愛するが，関係者の記録類の主要部分は上原がまとめている（1935-04-10，88～110頁）。何人かの記録中に渡邊・堀が現われるのは当然にしても，後に第 2 次探検に関わる野村榮三郎，第 1 次隊の本多，その他に吉弘滿成（日野強『伊犂紀行』の滿城は採らない）の名も見え，ついでながら一行に対する水野梅曉の来訪も伝えられる（1935-04-10，99～100，107頁；1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，176～181頁）。ここにおいて，第 1 次隊・佛蹟巡拜記編纂の関係者は，その事業のまとめというよりも大谷光瑞の次なる探査の一員となり，またその探査には来るべき第 2 次隊の一員をも含むという状況になっていた。

以上，2 つの角度から第 1 次探検と第 2 次探検の間の状況を検討した。事業継続の志向と断絶の状況，そしてその中で新たな踏査が実施されるという状況もある程度明らかになった。

第 2 次探検の前後――1907～1908年，梅上尊融のインド・アメリカ行――

1907年 5 月 4 日，大谷光瑞・籌子夫妻を含む一行は，前年 9 月以来の中国旅行を終えて神戸に帰着，同日帰山した（1954-10-01，44頁）。そして 3 週間後，今度は光瑞の弟で執行長の大谷尊重が渡英，さらに執行の梅上尊融と隨員渡邊哲信も同行して渡欧することが順次報道された（1907-05-07，1 面；1907-05-10a，1 面；1907-05-10b，2 面；1907-05-13，2 面）。ここで興味深いのは，大谷尊重の渡英に関係させて光瑞未踏査の地域を尊重が探検するということを含んだ「淳淨院師の探險」という記事（1907-05-17，1 面）で，「西派法主が前年來の外遊に豫定の探險區域中，亞剌比亞，亞細亞土耳其，波斯の三ヶ國のみ殘りあるを以て，今回渡英さるゝ大谷尊重師は歸朝の途次，右三ヶ國を巡回さるゝ筈なりと云ふ。」と報道されたことである。所謂大谷探検隊の第 1 次隊が踏査しなかった地域を補完する意味合いを含んでいるようで，これは注目に値いすると考えられる。

大谷尊重ら 3 名の京都出発は 5 月25日，同日夜敦賀出港（1907-06-01，9～10頁），ウラジオストク，シベリア鉄道経由で 6 月 8 日モスクワ（1907-06-29，13頁；1908-03-21，7頁），ロンドンには 6 月19日に到着している（1907-06-29，13頁；1907-07-30，2 面；1907-11-23，19頁；1908-03-21，7 頁）[10]。それからほぼ 2 か月の後，本山から梅上尊融に対し 8 月23日付で「歸朝之途次左之各地ヲ巡視スヘシ」との辞令が出され，具体的には「Permanbuco. Bahia. Rio de Janeiro. Monte Videw. Bueno Aires. Ponta Arenas. Valparaiso. Santiago. Iquigui. Callao. Lima. Guaguil. Quito. Panama. Salina Cruz. Mexico. New Orleans. Chicago. Seatle. Vancouver.」の各地を挙げているが（1907-09-07c，23頁），一方で 9 月 7 日に河野學一が敦賀から出発，ウラジオストク経由で欧州に派遣され，滞英中の一行との合流が予定されていた（1907-09-07b，11頁）。加えて，梅上の南北アメリカ巡視は，河野の着英を待って出発との報道もあった（1907-09-07a，11頁）。ただし河野は帰途インドを巡ることになっており，その目的は「回々教の實行方面を調査」することにあったという（1907-09-07b，11頁）。ここに

は大谷光瑞の意向との明記はないが，仏蹟巡拝の勧奨，さらに関連する調査は，必ずや光瑞の命令だったと推測される。

上掲の梅上の巡視予定地を，一部の綴りを訂正して現在の一般的表記で示し若干の補足をしておく。すなわち，ブラジルに渡って東端に近いペルナンブコ（Pernambuco），南下してバイア・リオデジャネイロ，ウルグアイのモンテビデオ（Montevideo），アルゼンチンのブエノスアイレス（Buenos Aires），南米南端を回ってチリのプンタアレナス・バルパライソ・サンチアゴ・イキケ（Iquique），ペルーのカヤオ・リマ，エクアドルのグアヤキル（Guayaquil）・キト，パナマ，メキシコのサリナクルス・メキシコとなり，以下の米国・カナダは説明不要であろう。南北アメリカへの出発まである程度時間的余裕があった梅上は，北米西海岸に近いフレズノでの任務を終えて1907年６月11日ニューヨークを発し同月17日にロンドンに到着していた朝枝不朽（1907-12-21，14頁）を伴い，９月７日に同地出発（1907-11-23，21頁；1908-03-20，2面），10月２日に錫蘭着，さらにインドへ赴きマドラス（現チェンナイ）・カルカッタ経由で佛陀伽耶・王舎城・鹿野苑等の仏蹟を巡拝，新出の阿育（アショーカ）王碑文で玄奘の記録と一致するという一碑を実見し，インドからの帰路はスエズを通過して途中で下船，ドイツ・オランダ・フランス・ベルギーを経て12月20日にロンドンに還った（1908-03-20，２面）。朝枝は仏蹟巡拝同行の後にコロンボから帰途につき11月22日神戸着，12月14日に本山で大谷光瑞に面会・報告している（1907-12-21，15頁）。この梅上一行のインド旅行の時期，ロンドンの渡邊哲信が発した書簡２通（９月22日付，10月１日付）が公表されているが（1907-11-02，12～16頁；1907-11-23，19～21頁），特に後者には留学中の大谷尊重の動向，オクスフォード近くのアビントン（Abington）でのホームステイへの言及がある。英国に戻った梅上は滞在10日（1908-03-20，2面；1908-03-21，７頁）というからおそらく1907年の末に上記南米・中米各地へ出発し，その大半の地域を巡った。ただし南米南端・プンタアレナスは経由せずアンデス越えのルートを採り，またメキシコ両地（サリナクルス・メキシコ）とニューオーリンズにも赴かなかったらしい（1908-03-20，２面）。ニューヨークを経由してシアトルに至り，同地を1908年３月２日に出港して同月16日，横浜に帰っている（1908-03-21，７頁）。

第２次探検の前後――1907～1909年，柱本瑞俊＝安満星のインド行――

ほぼこの時期，すなわち1907年冬に，柱本瑞俊は日本を発ってインドに至り，王舎城その他の地域を調査して長期滞在し，翌々年の1909年５月に帰朝したと講演録「現在の王舎城」（1913-05-06，91～95頁）に言う。この柱本による調査については詳細な記録を現在見出せず，後年の回想「カシユミール」（1942-08-01，35～40頁），「ヒマラヤの點描」（1942-10-01，63～69頁）から，わずかに1908年の８月と10月を含む時期の，表題の地域への踏査が知られるのみであろう[11]。

この柱本の滞在時期の1908年７月，西本願寺から派遣されたという安満星が，インド北部からカシュミールで活動を開始したという。７月20日から10月10日までのスリナガル・レー及び周辺地域への旅行短報が「ラダーク旅行記」（1909-01-01，12～13頁；1909-01-09，6～８頁）

で，これは後に気象観測資料も加え中川源三郎によって増補公刊された（1909-05-15，360～366頁；1909-08-15，附図第16，565～572頁）[12]。この安満星は，柱本瑞俊その人だと判明している（付記２参照）。1908年時点の気象観測としては，別記の第２次隊員橘瑞超によるモンゴル地域での記録があり，最近公表されている（2001-05-01，341～359頁）。

この年10月，上述の柱本の名で言及された人物はカシュミールにおり，第２次隊の橘・野村との連携もあり得た。光瑞が橘を心配して詠んだ漢詩「對月憶人　時瑞超在廸化　迪化唐時北庭輪臺縣地」があり「〔明治〕四十二年の頃」とされたが（1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，727頁），この初出と思しき漢詩とカシュミールの柱本を気遣った漢詩「其二　時瑞俊在罽賓」は1908年12月中旬に同時に公表されている（1908-12-19，3～４頁）。

1908年は上述のように第２次隊が出発した年であるが，その８月の２日と４日には，大谷尊由が香川黙識・堀賢雄を従え五臺山に達賴喇嘛を訪問，会見しており（1937-04-10［復刻＝1984-11-12］，185頁），これは仏教界・西本願寺としても重要な出来事だった。８月30日に帰国した堀は即日，六甲の新別荘の二樂荘に滞在していた光瑞に詳細を報告しており（1908-09-02，２面），ほどなく堀の談話による記事も出ている（1908-09-04，2面；1908-09-12，7～９頁）。さらに同年11月から12月にかけて，スウェン・ヘディン（Sven Hedin）が来日している。これにはヘディンに対する大谷光瑞の働きかけがあり，堀は11月２日の上海での出迎え以後終始世話をしており，ヘディンは西本願寺を２度訪問している（1908-12-05，7～８頁；1908-12-12a，6～９頁；2001-03-15，横３頁，26～27頁註⒅，⒆参照）。加えて同年12月６日，西本願寺において京都帝國大學文科大學の史學研究會が開催され，光瑞の講演，発掘品や拓本の陳列があった（1908-12-12b，17頁）。

以上，1908年後半の大谷光瑞に関わる状況にも及んだが，このうちヘディンについては，チベット探検を終えて９月にインドに出，11月に上海を経て来日という行程なので，上記の柱本，すなわち安満との関係が課題となろう。今後の追跡に待ちたい。

第２次探検期――1908～1909年，大谷尊重・渡邊哲信のアフリカ・インド行――

1908年10月末，大谷尊重と渡邊哲信はロンドンからサウサンプトンに至り，ここから尊重が南アフリカに向かった。見送った渡邊はロンドンに戻った日を後に「十一月三十一日」と誤記したが，そこで尊重にお供せよとの本山からの電報を受けたという（以上，1909-05-07，10頁）。おそらく京都からの打電に関連して，光瑞が背景と以後の予定を含め流した情報が「連枝の阿弗利加探見」との記事（1908-11-02，２面）になったと考えられ，またロンドンの渡邊から京都への電報が「淳淨院殿の倫敦出發」という記事（1908-11-07a，７頁）に見える電報であろう。渡邊は次々便で出立したという。

日本人によるアフリカ沿岸・内地踏査史上，これまで全く忘却されてきた大谷尊重と渡邊哲信の足跡，それが大谷光瑞の指示によるものであろうことは上記のようにほとんど疑いない。この方面に関する唯一の研究史整理かと考えられる西野照太郎「日本人によるアフリカ探検史」（川田順造編『民族探検の旅』第６集（アフリカ），学習研究社，1977年所収）では，1901

年から1907年にかけ五大洲をほとんど無銭旅行に近いかたちで巡った中村直吉が，1903 年に南アフリカから東岸部を北上した記録（中村・押川春浪編『亞弗利加一周』博文館，1910 年所収）を残した人物として評価され，他に「アフリカを“探検”した日本人は，第二次世界大戦以前には皆無であったといっても過言ではない」とし，また一方その「中村の足跡もアフリカではきわめて狭い」としている（以上，153頁）。中村から５年後，1908年から翌年にかけてアフリカ内地にも踏み込んだ大谷尊重・渡邊の足跡とその記録の存在を指摘する価値は少なくなかろう。

その唯一と思われる記録に若干の報道を加えてここにまとめると，まず11月17日尊重がケープタウン着との電報が京都に届き（1908-11-21，８頁）[13]，２週間後の12月１日に渡邊もケープタウンに到着，ヨハネスバーグの尊重から電命があり即日出発，二昼夜にして到着し随行となる。尊重は東南岸のダーバン往復旅行後という。その後一日は金鉱一覧，また一日はプレトリアに（以上，1909-05-07，10～11頁）。さらにキンバリー，北上してはマフェキングを経てブラワーヨ着，セシルローズの住宅を見てそこからは内陸を西北に進んでヴィクトリア瀑布に至った。戻ってソールズベリからベイラ港，そこから沿岸を北上してシンデ・モザンビーク・ダルエスサラーム・ザンジバルを経由しモンバサに滞在，ここで越年している（以上，1909-06-01，15～17頁）。列車で左手にキリマンジャロを見つつヴィクトリア・ニアンザ湖に至り，湖内の船で湖北ウガンダのエンテベ着，８日をかけて湖水一周の後，モンバサに帰還した[14]。以上が尊重・哲信のアフリカ踏査で，その後２人はモンバサから出航してインドに向かったが，東北の強暴風のため１日遅れ，ゴアを経由して「當地に昨日到着致候阿満氏出迎後便に讓り申候」という（以上，1909-07-01，15～17，19頁）。引用は２月１日の追伸部分で，到着は１月31日，東北風は正面からの風ゆえ遅延したと考えれば，ゴアを経由して到着した地とは孟買が推測されよう。「阿満」はすでに扱った「安満星」であろうか，そうだとすれば安満の滞印は確実なところ1908年７月から1909年２月を含む時期，ということになる。

インドにおける２人の足跡は，現在の記録把握からするとほとんど不明である。1909年の大谷尊重帰国時の談話にもとづく一記事では，1908年５月にアフリカ，すなわちエジプトに至りさらに内地に入ったことが述べられるが，一方で上記のようにアフリカ南端を廻ってその後インド洋経由で佛陀迦耶を含む仏蹟を参拝したとも述べられ，それを1909年１月から２・３月としている（1909-10-24，１面）。一方，渡邊の後の回想によると，自身の３度の佛陀迦耶参拝の最後を1908年とし，加えてエヴェレスト（現チョモランマ）遠望のためダージリンに行くも果たせず，尊重と別途遠望する計画を立ててついに宿願を成就したという（1935-10-01，39，42～43頁）[15]。1908年のエジプトから内地というのは，ピラミッド見学，さらにナイル遡上かと考えられるが，地中海旅行の延長の色彩が濃いものであろう。今のところ，アフリカ南端，一部内陸，東岸とこれに続くインド行，仏蹟参拝が一連の旅で，それを1908年11月から1909年２月あるいは３月にかけての活動と考えておく。

この後に関して，簡単に扱っておこう。推定では1909年３月か４月，２人はインドから英国に帰り，同年８月14日にロンドンを出発した（1909-08-21，7頁）。大西洋を渡っておそらくニューヨークに，さらに８月下旬に北米西海岸のヴァンクーヴァーから南下，各地の教況を巡視

するとの通報が本山からサンフランシスコに届いた（1909-09-01，32頁）。そして実際に尊重は9月7日サンフランシスコ着，以後オークランド・サンノゼ・ワトソンビル，9日ロサンゼルス着，さらにベーカーズフィールドを通過しフレズノ・ストックトン・サクラメント，そして11日夜シアトルへ（以上，1909-10-01，23頁［『米國佛教』第10年第10号のその他の各佛教會の「會報」欄，『羅府佛教』第3年第10号の「會報」欄にも情報多数］；1930-06-20，127頁，他），同月下旬の29日，再度サンフランシスコに来着，10月2日サンノゼ天文台再訪の後5日同港を解纜してハワイを経由，同月23日横浜に着し上陸一泊，翌日再度乗船し25日神戸入港，即日帰山した。

北米西海岸・近隣地域を南下・北上した大谷尊重と随行の渡邊は，9月7日のサンフランシスコ来着の時点で，光瑞がインド再探検出発のため尊重が帰朝を急ぐ旨を公言していて連絡・連繋あることを示し，また渡邊は急用でロンドンへ戻るとのこと，9月下旬の尊重のサンフランシスコ再訪時，同地まで同行し帰英の途についたらしい（以上，1909-10-01，23頁；1935-04-10，168～169頁）。渡邊が西海岸地域を発ったのは1909年の9月下旬と考えられ，ここに大谷尊重と渡邊の1907年5月以来の同行はまた一区切りとなる。渡邊はおそらく10 月中にロンドン帰着が可能と推測される。同地でインド旅行中ないしは出発後の光瑞からの連絡を待つことになり，結果的には孟買あるいはアデンからの電報によって1910年2月にポートサイドに到り，すでに述べたように光瑞夫人籌子・随員柱本を出迎えたのである（1935-04-10，168～169頁）。

なお，大谷尊重は帰国時に，英国宗教事情・アフリカ踏査・インド仏蹟参拝に関して談話中でわずかに触れたものの，10月15日に京都駅を通過して大陸に向かう伊藤博文を本山では大洲鐵也が門主光瑞代理として迎送（1909-10-23，12頁），ところが尊重の帰山翌日の26日に伊藤が銃撃され（1909-10-30，1～2頁参照），尊重の2年半の留学・巡遊に関わる事蹟やその取材も，公表の機を失ったらしい。上述の踏査に関して十分な記録が残されなかった一因とも考えられる。

おわりに

以上，大谷探検隊に関係した欧州留学者・各隊員の発着日の問題を可能な限り追跡し，さらに探検に関する諸記録の公表，須磨における記録編纂事業という継続的側面と，日露戦争による従軍布教の任務という断絶の双方を指摘し，また大谷光瑞の弟・尊重に隊員渡邊が随行した経緯も示した。一方，大谷光瑞の指示による各地での探検的活動は，従来全く知られていないものもあり，3次の探検のうち主に第2次にほぼ重なる時期のいくつかを記録にもとづき指摘した。梅上のインド行と南北アメリカ踏査，柱本すなわち安満のインド・カシュミール調査，そして大谷尊重と渡邊のアフリカ・インド踏査がそれである。特に尊重と渡邊がここで長期間同行しており，それゆえに渡邊は編纂事業に関与する機会を失い，また自身の動向が他者に知られにくい状況が続いた。

これらの踏査・探検は，欧州留学や中央アジア探検と合せれば，ほとんど五大陸を網羅する

ような志向性すら感じられよう。ここに，大谷光瑞が主導した所謂大谷探検隊の詳細を追跡し位置付けようとするならば，避けては見えなくなってしまう大きな踏査探検事業の背景が一方にあったらしいことを指摘した次第である。双方の追跡とその理解から，既知の諸側面もより一層充実したかたちで検討され解釈されることを期待する。

使用文献一覧

※大谷探検隊に関係する新聞記事や雑誌雑報，論文・書物などの文献の総数は，４桁をもって数える段階に至っている。筆者はそれらを1902-07-05aのように下線を付した発行年月日（時にa，b等を付す）で略号化して蓄積・配列し，出典や参照の表示にも使用しているので，一連の作業に関わる本稿においても同様とする。本稿の大谷光瑞・大谷探検隊関係分は以下に列記するもので，関係個所は直後に掲載紙面ないしは頁数で示すこととする。関係の程度が比較的希薄な文献については，本文や註で通常に表示する。なお，1909-05-15，1909-08-15は和田秀寿氏の御教示による。

1900-11-26：藤島了穩「巴里近信　第一　萬國宗教歴史會の状況　第二　嗣法猊下及日野連枝」『教海一瀾』第81号，26～30頁。
1900-12-11：（無記名）「藤島了穩氏」『教海一瀾』第82号，17頁。
1901-12-06：（無記名）「正會員動靜」『六條學報』第６号，131～133頁。
1902-06-25：［武田篤初他］「松原執行送列の詩歌」『教海一瀾』第136号，21～22頁。
1902-07-05a：（無記名）「松原執行」『中外日報』１面。
1902-07-05b：（無記名）「松原執行の電報」『教海一瀾』第137号，12頁。
1902-10-15：（無記名）「松原執行の歸朝」『教海一瀾』第147号，11～12頁。
1903-05-08：（無記名）「井上弘圓氏」『中外日報』１面。
1903-05-14：井上弘圓談「大谷光瑞師一行　支那印度の探險(一)」『神戸又新日報』７面。
1903-05-15：（無記名）「白書院の陳列品」『教海一瀾』第168号，４頁。
1903-05-27：（無記名）「西派法主の著述」『中外日報』１面。
1903-05-28：（無記名）「足利義藏氏」『中外日報』１面。
1903-06-05a：（無記名）「任免辭令」『教海一瀾』第170号，３～５頁（『本山録事』123～125頁）。
1903-06-05b：（無記名）「佛蹟巡拜記の編纂」『教海一瀾』第170号，10頁。
1903-06-05c：藤井宣正「印度通信」『高輪學報』第20号，86頁。
1903-07-10：（無記名）「佛蹟調査員の歸朝」『中外日報』２面。
1903-07-25：渡邊柞原・堀晩雪「庫車近信」『教海一瀾』第175号，16～23頁。
1903-07-30：（無記名）「島地大等氏の歸朝」『中外日報』２面。
1903-08-01：渡邊柞原・堀晩雪「中央亞細亞探險記」『中央公論』第18年第８号，36～41頁。
1903-08-04：上海哲魔「上海の奇遇」『中外日報』１面。
1903-08-05：（無記名）「新歸朝者」『教海一瀾』第176号，20頁［文中の「芳野」は正しくは「茂野」］。
1903-08-08：（無記名）「上海通信」『中外日報』２面。
1903-08-18：（無記名）「動靜及會計報告」『六條學報』第23号，77～78頁。
1903-08-23：島地雷夢・島地大等「清水嘿爾〔死亡広告〕」『三寶叢誌』第233号，39頁。
1903-09-01：渡邊柞原・堀晩雪「中央亞細亞探險記　二」『中央公論』第18年第９号，35～38頁。
1903-09-05：（無記名）「本年前半期の軍隊布教」『教海一瀾』第179号，10～11頁。
1903-09-10：（無記名）「テントの引拂ひ」『中外日報』１面。
1903-09-15：（無記名）「本多，野村兩氏の歸朝」『教海一瀾』第180号，12頁。

1903-09-18a：島地大等「錫崙に在りし六日間の日記　上。古倫母の三日間」『六條學報』第24号，32〜38頁。
1903-09-18b：（無記名）「動靜」『六條學報』第24号，72頁。
1903-09-23：島地［黙雷］談「吊問談話」『三寶叢誌』第234号，24〜27頁［改題再録＝1978-10-10，360〜365頁］。
1903-11-25：（無記名）「薗田宗惠氏の歸朝」『教海一瀾』第187号，31頁。
1903-12-05：（無記名）「薗田氏」『米國佛教』第４年第12号，17頁。
1903-//-//：（無記名）『藤井故宣正紀念』本与板［刊年も推定／後半64〜66頁：嶋地大等「追悼文 清國福建省厦門にて」］。
1904-01-10：本願寺室内部（本多惠隆代表）『印度撮影帖』本願寺室内部。
1904-01-15：大谷光瑞「パミール紀行梗概」『地學雜誌』第16年第181号，附図第1，3〜11頁［図版を除き改題再録＝1937-04-10〈復刻＝1984-11-12〉，前付３〜６頁］。
1904-01-23：島地嘿雷「觀月山莊所見有感」『三寶叢誌』第238号，33頁。
1904-01-25：（無記名）「井上氏上海に着す」『教海一瀾』第193号，21頁。
1904-02-05：（無記名）「升巴氏「ダルニー」に着す」『教海一瀾』第194号，５〜６頁。
1904-02-07：［大谷光瑞］「大法主猊下御繼職の御消息」『布教叢誌』第17年第２号，巻頭１〜２頁［ほぼ再録＝1954-10-01，27〜28頁］。
1904-02-18：前田德水「大峨眉山紀行概畧」『六條學報』第29号，58〜62頁［改題して前文を除きほぼ再録＝1937-04-10〈復刻＝1984-11-12〉，139〜141頁］。
1904-05-07a：（無記名）「中亞の大旅行僧」『中外日報』１面。
1904-05-07b：哲魔「渡邊哲信氏の歸朝」『中外日報』２面。
1904-05-07c：（無記名）「渡邊哲信氏の歸朝」『教海一瀾』第205号，18〜19頁。
1904-05-14：［渡邊哲信］「中央亞細亞旅行談（其一）」『教海一瀾』第206号，14〜15頁。
1904-05-20：（無記名）「中央アジアの探撿者」『地質學雜誌』第11巻第128号，203頁。
1904-05-25a：（無記名）「渡邊哲信氏」『中外日報』２面。
1904-05-25b：（無記名）「流砂河畔の探險談」『中外日報』２面。
1904-05-25c：（無記名）「大陸探險の零碎」『中外日報』４面。
1904-05-28：［渡邊哲信］「中央亞細亞旅行談（其二）（渡邊哲信氏の談）」『教海一瀾』第208号，12〜13頁。
1904-06-28：渡邊哲信談「中央亞細亞探檢談（一）」『東京朝日新聞』２面［一部削除して再録＝1937-04-10〈復刻＝1984-11-12〉，219〜220頁］。
1904-09-01：柞原生［＝渡邊哲信］「中亞馬蹄の塵」『中央公論』第19年第８号，48〜52頁。
1904-09-24：渡邊哲信「淳淨院殿御從軍日誌（其一）」『教海一瀾』第215号，15〜17頁。
1904-12-23a：（無記名）「内田公使の來山」『中外日報』２面。
1904-12-23b：（無記名）「渡邊哲信氏の渡清」『中外日報』２面。
1905-04-15：薗田宗惠「現時の印度」『地學雜誌』第17年第196号，247〜255頁。
1905-05-15：薗田宗惠「現時の印度（承前）」『地學雜誌』第17年第197号，316〜325頁。
1905-12-07：（無記名）「淳淨院連枝の御歸山を迎ふるの辭」『布教叢誌』第18年第12号，１〜４頁。
1906-10-//：Kosui Otani, “The Japanese Pilgrimage to the Buddhist Holy Land, A Personal Narrative of the Hongwanji Expedition of 1902-03”, *The Century Magazine*, Vol.LXXII, No. 6, pp.866-878.
1906-12-01：島地大等編『文學士藤井宣正遺稿　愛楳全集』森江書店。
1907-05-07：（無記名）「大谷尊重師の洋行」『中外日報』１面。
1907-05-10a：（無記名）「大谷尊重師の渡英」『中外日報』１面。
1907-05-10b：（無記名）「梅上師も或は洋行」『中外日報』２面。

1907-05-13：（無記名）「両連枝の出發」『中外日報』２面。
1907-05-17：（無記名）「淳淨院師の探險」『中外日報』１面。
1907-06-01：（無記名）「執行長，執行の出發」『教海一瀾』第365号，９～10頁。
1907-06-29：（無記名）「兩執行の倫敦到着」『教海一瀾』第369号，13頁。
1907-07-30：（無記名）「大谷尊重師の一行」『中外日報』２面。
1907-09-07a：（無記名）「梅上執行の歸朝期」『教海一瀾』第379号，11頁。
1907-09-07b：（無記名）「河野學一氏の西航」『教海一瀾』第379号，11頁。
1907-09-07c：（無記名）「任免辭令」『教海一瀾』第379号，23頁（『本山録事』263頁）。
1907-09-17：島地雷夢編『紫風全集』鷄聲堂。
1907-11-02：渡邊哲信「倫敦通信」『教海一瀾』第387号，12～16頁［1907年９月22日付書簡］。
1907-11-23：渡邊哲信「倫敦通信」『教海一瀾』第390号，19～21頁［1907年10月１日付書簡］。
1907-12-21：（無記名）「朝枝不朽氏の歸朝」『教海一瀾』第394号，14～15頁。
1908-03-20：［梅上尊融］「梅上師の大陸旅行談」『中外日報』２面。
1908-03-21：（無記名）「梅上執行の歸山」『教海一瀾』第407号，７～８頁。
1908-04-25：（無記名）「任免辭令」『教海一瀾』第412号，29～31頁（『本山録事』109～111頁）。
1908-07-25：橘瑞超「清國通信」『教海一瀾』第425号，16～19頁［1908年４月12日門司～14日上海及び着後の記録］。
1908-08-01：橘瑞超「清國通信（承前）」『教海一瀾』第426号，12～14頁［1908年４月21日～25日の記録］。
1908-08-08：橘瑞超「清國通信（承前）」『教海一瀾』第427号，11～13頁［史料抜粋及び1908年４月26日～28日の記録］。
1908-08-15：橘瑞超「清國通信（承前）」『教海一瀾』第428号，11～15頁［史料抜粋及び1908年４月30日～５月１日の記録］。
1908-09-02：（無記名）「堀賢雄氏」『中外日報』２面。
1908-09-04：（無記名）「五臺山に於ける喇嘛」『中外日報』２面［無記名ながら主として堀賢雄談話に依拠と明記］。
1908-09-12：堀賢雄談「五臺山に於ける達賴喇嘛會見」『教海一瀾』第432号，７～９頁。
1908-09-26：橘瑞超「清國通信（八月十五日發行に續き）」『教海一瀾』第434号，29～33頁［史料抜粋及び1908年５月３日～６日の記録］。
1908-10-03：橘瑞超「清國通信（前號の續）」『教海一瀾』第435号，26～28頁［1908年５月８日～９日の記録］。
1908-10-24：橘瑞超「清國通信」『教海一瀾』第438号，12～13頁［1908年５月10日～13日の記録］。
1908-11-02：（無記名）「連枝の阿弗利加探見」『中外日報』２面。
1908-11-07a：（無記名）「淳淨院殿の倫敦出發」『教海一瀾』第440号，７頁。
1908-11-07b：橘瑞超「清國通信（續）」『教海一瀾』第440号，10～11頁［1908年５月18日～６月15日の略記］。
1908-11-21：（無記名）「淳淨院殿のケープ御着」『教海一瀾』第442号，８頁。
1908-12-05：（無記名）「ヘデイン博士の來山」『教海一瀾』第444号，７～８頁。
1908-12-12a：［ヘディン講，堀賢雄訳］「ヘディン博士の講演」『教海一瀾』第445号，６～９頁。
1908-12-12b：（無記名）「本山に於ける史學研究會」『教海一瀾』第445号，17頁。
1908-12-19：［大谷光瑞］「對月憶友　時瑞超在迪化，迪化唐時北庭輪台縣地」「其二　時瑞俊在罽賓」『教海一瀾』第446号，３～４頁［前者は改題してほぼ再録＝1937-04-10〈復刻＝1984-11-12〉，727頁］。
1909-01-01：安滿星「ラダーク（Ladark）旅行記」『教海一瀾』第448号，12～13頁［正しくはLadakh，Ladak／1908年７月20日～８月13日の記録］。

1909-01-09：安満星「ラダーク（Ladark）旅行記（續き）」『教海一瀾』第449号，６～８頁［正しくはLadakh，Ladak／1908年８月（中旬～）30日～10月10日の記録］。
1909-05-07：［渡邊哲信］「渡邊氏の來翰」『教海一瀾』第458号，10～12頁［1909年１月下旬インド洋上本文記］。
1909-05-15：中川源三郎「ヒマラヤ西部横斷觀測記」『地學雜誌』第21年第245号，360～366頁［安満星観測報告；大谷光瑞貸附／1908年７月20日～９月５日の記録］。
1909-06-01：［渡邊哲信］「渡邊氏の來翰（つゞき）」『教海一瀾』第459号，15～17頁［1909年１月下旬インド洋上本文記］。
1909-07-01：［渡邊哲信］「渡邊氏の來翰（つゞき）」『教海一瀾』第460号，15～19頁［1909年１月下旬インド洋上本文記，２月１日寄港某地追伸記］。
1909-08-15：中川源三郎「ヒマラヤ西部横斷觀測記（接第二百四十五號）」『地學雜誌』第21年第248号，附図第16，565～572 頁［1908年９月３日～10月12日の記録］。
1909-08-21：（無記名）「淳淨院殿の御歸朝」『龍谷週報』第26号，７頁。
1909-09-01：（無記名）「淳淨院殿の御巡錫」『米國佛教』第10年第９号，32頁。
1909-09-18：（無記名）「任免辭令」『龍谷週報』第30号，３～４頁（『本山録事』253～254頁）。
1909-10-01：（無記名）「米國佛教會々報」『米國佛教』第10年第10号，23頁。
1909-10-23：（無記名）「伊藤公爵の通過」『龍谷週報』第35号，12頁。
1909-10-24：（無記名）「大谷尊重師」『中外日報』１面。
1909-10-30：一記者「藤公の薨去について」『龍谷週報』第36号，１～２頁。
1910-01-21：關露香「印度探撿（廿七）蒙古新疆探撿(一)」『大阪毎日新聞』１面［改題してほぼ再録＝1913-04-21，90～92頁］。
1910-02-03：（A correspondent），“Exploration in Chinese Turkestan”, *The Times*, p.5.
1910-02-25a：（Anonym.）, “M. Zuicho Tachibana...”, *The London and China Express*, Vol. LII, No.2429， p.144.
1910-02-25b：野村榮三郎「蒙古探撿談」『中外日報』２面。
1910-02-25c：（無記名）「足利瑞義師」『中外日報』２面。
1910-02-26：（無記名）「野村部員」『龍谷週報』第53号，25頁。
1910-03-24：（Marlborough House），“Court Circular”，*The Times*, p.11.
1910-03-25：（Anonym.），“Count Otani...”，*The London and China Express*, Vol.LII, No. 2433， p.228.
1910-05-28a：（無記名）「大谷執行長の西行を送る」『龍谷週報』第66号，１頁。
1910-05-28b：（無記名）「執行長海外渡航」『龍谷週報』第66号，10頁。
1910-06-//：（Anonym.), “Anglo-Japanese General Directory”,『*The Anglo-Japanese Review* 日英時報』Vol. I , No.5, pp.14-17.
1910-06-25：（無記名）「英京倫敦安着」『龍谷週報』第70号，２頁。
1910-07-09：（無記名）「執行長倫敦出發」『龍谷週報』第72号，17頁。
1910-07-23：（無記名）「執行長の歸山」『龍谷週報』第74号，２頁。
1910-09-24：（無記名）「猊下御歸朝と御迎」『龍谷週報』第83号，９頁。
1910-10-15：（無記名）「猊下御歸山」「御裏方御歸山」『教海一瀾』第476号，15～17，17～18頁。
1912-05-29：（無記名）「剛膽の瑞超師　近日無事歸朝せん」『國民新聞』４面。
1912-06-15：橘瑞超「中亞探撿旅行記(一)」『大阪毎日新聞』１面［改題再録＝1912-12-28，1～４頁］。
1912-12-28：橘瑞超『中亞探檢』博文館［再録＝1937-04-10，731～799頁；復刻＝1988-09-20；現代語訳文庫化＝1989-06-10］。
1913-04-21：關露香編『本派本願寺法主大谷光瑞伯　印度探檢』博文館［復刻＝1993-08-25］。

1913-05-06：柱本瑞俊「現在の王舍城」『簡易佛教講義録』第 2 号，91～95頁［二樂莊講演 9 ～13頁］。
1930-06-20：桑港佛教會文書部編『桑港佛教會開教三十年記念誌』陰山鐵二郎。
1935-04-10：上原芳太郎『光顔院籌子夫人』興教書院。
1935-10-01：渡邊哲信「雪山と死海（世界最高地と最低地）」『現代佛教』第12年第126号，39～43頁。
1937-04-10：上原芳太郎編『新西域記』上巻・下卷，有光社［復刻＝1984-11-12］。
1939-03-11：日笠正治郎編『國士龜井陸良記念集』國士龜井陸良記念集編纂會。
1939-12-31：薗田香勳編「薗田宗惠歐米印日録(一)」『顯眞學報』第26号，83～91頁［改題再録＝1975-01-03，1～4，9～18頁］。
1940-05-31：薗田香勳編「薗田宗惠歐米印日録(三)」『顯眞學報』第28号，89～96頁［改題再録＝1975-01-03，29～41頁］。
1940-06-30：薗田香勳編「薗田宗惠歐米印日録(四)」『顯眞學報』第29号，86～96頁［改題再録＝1975-01-03，45～59頁］。
1940-07-15：上原芳太郎『行雲流水』有光社。
1940-11-30：薗田香勳編「薗田宗惠歐米印日録(六)」『顯眞學報』第31号，91～95頁［改題再録＝1975-01-03，73～80頁］。
1941-05-05：薗田香勳編「薗田宗惠歐米印日録(八)」『顯眞學報』第33号，68～79頁［改題再録＝1975-01-03，91～108頁］。
1941-06-30：薗田香勳編「薗田宗惠印度紀行(一)――歐米印日録の九――」『顯眞學報』第34号，73～85頁［改題再録＝1975-01-03，111～126頁］。
1942-08-01：柱本瑞俊「カシユミール」『大乘』第21巻 8 月号（第248号），35～40頁。
1942-10-01：柱本瑞俊「ヒマラヤの點描」『大乘』第21巻10月号（第250号），63～69頁。
1942-11-01：大谷光瑞『印度地誌』有光社。
1954-10-01：鏡如上人七回忌法要事務所編『鏡如上人年譜』同事務所。
1955-12-25：禿氏祐祥「七十七年回顧録」『龍谷史壇』第40号，１～73頁。
1968-09-20：常光浩然『明治の佛教者』上，春秋社［392～400頁：「薗田宗惠」］。
1975-01-03：薗田香勲編『薗田宗惠米国開教日誌』法蔵館。
1977-09-15：三井文彦校注『藤井宣正　印度霊穴探見日記』真宗寺。
1978-04-15：吉川小一郎「月見山のころ」倉田整治編『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』瑞門会，109～112頁。
1978-10-10：二葉憲香・福嶋寛隆編『島地黙雷全集』第五巻，本願寺出版部。
1984-11-12：上原芳太郎編『新西域記』上巻・下卷，別冊，井草出版。
1985-09-30：片山章雄「大谷探検隊関係記録拾遺　Ⅰ」『(季刊）東西交渉』第 4 巻第 3 号（通巻第15号），口絵 1 ～ 4 頁。
1986-06-30：片山章雄「大谷探検隊関係記録拾遺　Ⅳ」『(季刊）東西交渉』第 5 巻第 2 号（通巻第18号），口絵 1 ～ 4 頁。
1986-12-30：片山章雄「大谷探検隊関係記録拾遺　Ⅴ」『(季刊）東西交渉』第 5 巻第 4 号（通巻第20号），30～36頁。
1988-09-20：橘瑞超『中亜探検』(明治シルクロード探検紀行文集成第23巻)，ゆまに書房。
1989-06-10：橘瑞超『中亜探検』(中公文庫 M417)，中央公論社。
1991-01-21：（無記名）「佛教東漸〈3〉西域を行く　ヘディンとの交友」『京都新聞』朝刊 7 面［再録＝1992-08-12，44～50頁］。
1992-03-25：龍谷大学三百五十年史編集委員会編『龍谷大学三百五十年史』資料編第四巻，龍谷大学。
1992-08-12：京都新聞社編『佛教東漸　シルクロード巡歴』京都新聞社。
1992-12-25：白須淨眞『忘れられた明治の探険家　渡辺哲信』中央公論社。

1993-08-25：關露香編『大谷光瑞伯　印度探検』（出にっぽん記第１巻），ゆまに書房。
1994-03-01：白須浄真「『新西域記』未収録史料の出現について――伊東洞月・足利瑞義・渡辺哲信の上原芳太郎への返信――」『本願寺史料研究所報』第７・８号，６～28頁。
1994-05-18：本多隆成『大谷探検隊と本多恵隆』平凡社。
1996-11-30：百済康義代表「大谷探検隊収集西域文化資料とその関連資料」『龍谷大学佛教文化研究所紀要』第35集，横41～109頁。
1997-01-30：柴田幹夫「孫文と大谷光瑞」『孫文研究』第21号，１～14頁。
1999-06-//：片山章雄代表『近代アジア・日本関係における大谷光瑞の足跡資料の基礎的整理』私家版［縦１～35頁：「大谷光瑞の書簡等判読肉筆資料テキスト」］。
2001-03-15：篠﨑陽子「堀賢雄氏（M.Hori）直筆英文史料“*The Lob-Nor. N.Przhevalsky & S. Hedin*.”（Oxford,9.June 02.）について」『龍谷史壇』第115号，横１～44頁。
2001-04-20：片山章雄「大谷探検隊の足跡　未紹介情報と蒐集品の行方を含めて」『（季刊）文化遺産』第11号，30～33頁。
2001-05-01：橘瑞超『使命記』橘照嶺［341～359頁：「使命記蒙古之部　氣象表」］。
2001-10-20：片山章雄「1902年８月，大谷探検隊のロンドン出発」『東海大学紀要　文学部』第75輯，横１～20頁。
2002-01-//：喬玉『橘瑞超』（走進中国西部的探險家系列叢書），中国民族攝影芸術出版社。
2002-02-28：白須淨眞「第一次大谷探検隊緬甸（ビルマ）・雲南・貴州・湖南・長江ルートと野村礼譲――2001年，野村礼譲資料調査報告――」『東洋史苑』第59号，横23～57頁。
2002-03-//：本多得爾監修，片山章雄整理・編集『大谷光瑞及び欧亜随従者・探検隊員送受現存書簡資料の整理と研究』第１分冊，東海大学文学部歴史学科東洋史第２研究室。
2002-03-20a：金子民雄『西域　探検の世紀』（岩波新書赤776），岩波書店。
2002-03-20b：片山章雄「大谷光瑞の欧州留学」『東海大学紀要　文学部』第76輯，横１～20頁。
2002-03-31：片山章雄「大谷光瑞の英文著作」『東海史學』第36号，横13～26頁。
2002-05-//：本多得爾監修，片山章雄整理・編集『大谷光瑞及び欧亜随従者・探検隊員送受現存書簡資料の整理と研究』第２分冊，東海大学文学部歴史学科東洋史第２研究室。

註

１）紀要前輯の拙文と同時に，光瑞のロンドン着を同年３月上旬と推測する文献（2002-03-20a，80頁）が出たが，依拠したらしい文献への批判はすでに拙文で済ませてある（2002-03-20b，横11頁）。

２）1907-09-17，383頁の「二十三日無事コロンボーに着」は採らない。

３）1907-09-17，383頁の「多分本日孟買港に安着」（10月31日付書簡）は採らない。

４）これと矛盾するわけではないが，翌1904年２月の時点で，吉見圓藏に関して「現今北米に滞在す」との記載もある（1904-02-18，59～60頁）。

５）野村については2002-02-28，横23～57頁があるが，『中外日報』その他の検索が不十分で，本文指摘の記事への言及もない。

６）一例として『ザ・タイムズ』1910年２月３日の記事“Exploration in Chinese Turkestan”（1910-02-03，p.5）は 17年前に示した（1985-09-30，１頁①）。ここでは橘がエジプト経由渡英中でかつ記事締切時点で英国未着と読める週刊新聞記事（1910-02-25a，p.144）と，ロイター配信を抄録したらしい『ザ・タイムズ』同年３月 24日の記載（1910-03-24，p.11）に比べより配信原文に近いと推測される翌日の同上誌記事（1910-03-25，p.228）のみ追加例示し，その他の解説や対校に紙数を要する記事の紹介は別稿に譲る。

1910-02-25a，p.144の全文：

“M. Zuicho Tachibana, a young Japanese explorer, has passed through Bombay on his way

to Europe, *via* Egypt, to place before the learned societies the vast number of valuable manuscripts which he has collected in the course of his wanderings from Peking to Kashgar. Dr. Denison Ross, formerly of London University, now Principal of the Calcutta University, has had an opportunity of examining these manuscripts, and has pronounced them of great value."

1910-03-25，p.228の全文（下線個所は1910-03-24，p.11にある部分で，その記事では country と on の間に"，Reuter's Agency is informed," が入っている）：

"Count Otani, Lord Abbot of the Shinshu sect of Buddhists, has arrived in this country on a private visit. He will later join the Countess, who is at present cruising in the Mediterranean, in Paris, and expects to remain in Europe about four months, returning to Japan in the autumn."

7）異本については2002-03-31，横20頁参照。

8）特に1904-05-25a，2面の記事に見える「寫眞數百枚を幻燈映畫」とする予定は興味深く，1959年10月14 日に渡邊家から龍谷大学に購入移管された関係品目録中に見える「西域旅行スライド乾板59」（1996-11-30， 横45頁，47頁注②）は，これと関係するかもしれない。

9）水野梅曉と大谷光瑞はいつ出会ったかという問題に関して，他者の回想を示して模索し，また1906年から翌年の光瑞の中国旅行時，あるいは1909年 9 月の光瑞のインド旅行途次の上海滞在時を推測する文献がある（1997-01-30， 5 頁）。座談会で水野本人は，龜井陸良が水野と大谷光瑞を握手させようとしたこと，死の直前の武田と面会したこと，葬儀後の1905年 5 月，京都で武田の一件に関して光瑞から謝辞を受けたことを話題にしている（1939-03-11，318～320頁）。

10）1908-03-20，2面の「六月二十日」は採らない。

11）大谷光瑞がカシュミールの地に関し，「不肖の門下は周年居住せしも……」（1942-11-01，156頁）と書いたのは，この柱本，すなわち後述する安滿を指している可能性が高い。

12）大谷光瑞がヒマラヤ山脈の西端に関し，「ザンスカー（Zanskar），ルプシュ（Rupshu）の兩地方の如きは不肖の門下之を通過せしに……」（1942-11-01，155頁）と書いたのは，この安滿（＝柱本）を指しているのだろう。「ザンスカール氷河」（1909-08-15，附図第16の第 3 図）参照。

13）11月17日は尊重のケープタウン着か，あるいは電報の京都着か，判然としない。

14）"忘れられた明治の探険家"ともされた渡邊は「コンゴを探険した」らしいが，それを裏付ける資料は指摘されていない（1992-12-25，207頁）。1909-06-01，17頁には，「モンバサは英領東亞弗利加に在りしユガンダ及コンゴウの港」とある。ヴィクトリア湖到達ではコンゴに入ったと言えないが，渡邊の上記の理解・表現は，後にコンゴに関するエピソードを残した背景になったとも疑われる。

15）渡邊が1908年とするのは，単純に 1 年ずれた誤りか，あるいは前年にも確かにインドに赴いていてその時のことを指しているのか，なお判然としない。渡邊はダージリンからの遠望失敗の後，「シャム國境の四站，五十哩を踏破して……トングル……サンダカフー……ハールト（一萬一千八百十六尺）に到り」エヴェレストを遠望したという（1935-10-01，42頁）。「シャム國境」は「シッキム國境」であろう。大谷光瑞もこの地からのエヴェレスト遠望に言及している（1942-11-01，159～161頁）。

付記 1　本稿における引用文中の読点は，紀要の掲載形式に合わせたためすべて「,」に変更している。また，引用箇所の一部の漢字は新字になっている。

付記 2　校正中に柱本照映『桃源山明覺寺誌』（明覺寺，2002年 3 月31日発行）を確認して本稿における柱本瑞俊と安滿星に関する記載を補正することができた。